スケジュール

★ A メイン会場　B サブ会場（中継のみ）

DAY1 10月23日(火)

	A 大研修室	B 研修室 1-3	C 研修室 5	D 特設ブース
12:30				130 12:30~18:00 女性が伸ばす競技力、女性だから出来ること
13:00	13:00 開会挨拶		120 13:00~18:00 2028 年、あなたは何をしていますか？デュアルキャリアのすすめ デュアルキャリア塾	
13:30	★ 101 13:10~14:30 平昌 2018 大会におけるハイパフォーマンスセンターの医・科学サポート活動			
14:00				
14:30				
15:00	★ 102 14:40~15:40 カナダにおける国際競技力向上戦略			
15:30				
16:00	103 15:50~17:00 アスリートデータがスポーツ現場を支える	104 15:50~17:40 2028 年、あなたは何をしていますか？デュアルキャリアのすすめ 人生 100 年時代の自分のために		15:40~16:30 ワークショップ①
16:30				
17:00				17:00~17:40 ワークショップ②
17:30				
18:00				

アスリートキャリアアドバイザー相談窓口

DAY2 10月24日(水)

	A 大研修室	B 研修室 1-3	C 研修室 5	D 特設ブース
9:00	★ 201 9:00~10:00 エリートアスリートのための栄養サポート戦略		220 9:00~17:00 国立スポーツ科学センター 研究発表	230 9:00~18:00 女性が伸ばす競技力、女性だから出来ること
9:30				
10:00				
10:30	202 10:10~11:20 ハイパフォーマンスセンターのトータルサポート	203 10:10~11:00 パスウェイ探求のすゝめ		
11:00				
11:30		204 11:10~12:00 2020 年以降を見据えたアスリート育成強化のプランニング	11:20~12:00 ポスター発表	11:20~12:00 ポスター発表
12:00				
12:30				
13:00	205 12:50~13:40 ハイパフォーマンススポーツにおける女性の活躍	206 12:50~13:40 世界で勝ち続けるには理由がある		
13:30				
14:00	★ 207 13:50~15:00 ハイパフォーマンスにおけるコーチング手法			
14:30				
15:00				
15:30	208 15:10~16:00 大会における感染症対策	209 15:10~16:00 東京 2020 大会の価値ある成功に向けて		
16:00				
16:30	★ 210 16:10~17:10 東京 2020 大会を 2 年後に控えた今、医・科学ができること			
17:00				
17:30	★ 211 17:15~18:00 東京 2020 大会以降も見据えて、世界が目指すところ、そしてハイパフォーマンスセンターが目指す姿			
18:00				

DAY1 プログラム

13:10～14:30　オープニング　　会 場 A B

101 平昌2018大会におけるハイパフォーマンスセンターの医・科学サポート活動

石毛 勇介、奥脇 透、横澤 俊治

平昌2018大会に向けてハイパフォーマンスセンターでは様々な医・科学サポートを行いました。競技現場からの声と共に各種支援の取り組みを振り返り、平昌2018大会での成果や課題を整理し、東京2020大会を含めた今後にどのように活かすべきかを議論します。

14:40～15:40　基調講演　　会 場 A B

102 カナダにおける国際競技力向上戦略

アン・マークリンガー

カナダは自国開催となるバンクーバー2010冬季大会に向け、スポーツ関係機関が合同戦略「Own The Podium (OTP)」を策定し、最多メダル獲得国に輝きました。その後の変遷を経てOTPは現在も各競技への投資戦略決定機関として重要な役割を担っています。この度CEOのアン・マークリンガー氏をお招きし、カナダにおける近年のメダル獲得戦略をご紹介いただきます。

15:50～17:00　　会 場 A

103 アスリートデータが スポーツ現場を支える ～データでつながるプロフェッショナル支援・連携～

徳南 堅太、亀井 明子、白井 克佳、田村 尚之

ハイパフォーマンスセンターでは、アスリートが自身のコンディションデータを確認しながら、日々質の高いトレーニングを行うための仕組みづくりに取り組んでいます。2018年度からは既存の支援システムを統合し「アスリートデータセンター」の運用を開始しました。これを活用した、トレーニング及び栄養サポートについてご紹介します。

15:50～17:40　　会 場 B

104 2028年、あなたは何をしていますか？～デュアルキャリアのすすめ～ 人生100年時代の自分のために

永井 崇匡、山口 美咲、千田 健太／宇城 元、森田 卓、髙嶌 遥／ポール・ワイルマン

これからの時代を生きるアスリートは、「競技者」としてだけでなく、「人」としてのキャリアも同時に歩む「デュアルキャリア」の考え方を持つことが重要です。自身の「デュアルキャリア」実現に向けて取り組んだアスリートの事例と、大学生アスリート対象のキャリア支援情報をご紹介します。

13:00～18:00　ブース展示　　会 場 C

120 2028年、あなたは何をしていますか？～デュアルキャリアのすすめ～ デュアルキャリア塾

デュアルキャリアの考え方とその支援の取り組みを紹介します。また、アスリートキャリア形成支援の専門家である「アスリートキャリアアドバイザー」との相談ブースを設置します。

12:30～18:00　ブース展示　　会 場 D

130 女性が伸ばす競技力、女性だから出来ること

スポーツ庁委託事業 女性アスリートの育成・支援プロジェクト「女性アスリートの戦略的支援プログラム」

女性アスリートの国際競技力向上のための支援や、ジュニア期から健全に競技を継続できる環境の整備を目的に、各方面で様々な取り組みが行われています。関係組織における取り組みや女性アスリートに関する調査・研究で得られた知見等をご紹介します。

15:40～16:30　ワークショップ①「アスリートにおける産後期トレーニングの実際」
17:00～17:40　ワークショップ②「女性スポーツにおけるメンタリングとは？」

DAY2 プログラム

9:00～10:00　基調講演　　会場 A B

201 エリートアスリートのための栄養サポート戦略
～オーストラリア国立スポーツ研究所（AIS）28年間の軌跡～

ルイーズ・バーク

オーストラリア国立スポーツ研究所（AIS）のスポーツ栄養部門を設立から率いると共に、国際的権威として長年世界のスポーツ栄養学も牽引するルイーズ・バーク氏から、これまでAISで取り組まれてきたエリートスポーツにおける栄養サポートの変遷についてご紹介いただきます。

10:10～11:20　　会場 A

202 ハイパフォーマンスセンターのトータルサポート～レスリングの事例～

相澤 勝治、近藤 衣美、西牧 未央、山下 大地

ハイパフォーマンスセンターの医・科学サポートを、年間のトレーニング計画にどう取り入れるか事前に検討・調整することで、より高いサポート効果が期待できます。レスリングを事例に、選手やチームの強化に繋がるサポート活用方法を紹介します。

10:10～11:00　　会場 B

203 パスウェイ探求のすゝめ～アスリートの視点から～

坂爪 亮介、ジェイソン・ガルビン

トップアスリートに至る過程（パスウェイ）において、パフォーマンスの向上を促進・阻害する要因とは何か？革新的な取り組みで世界トップクラスに登りつめたアスリートの事例を、アスリート育成フレームワーク「FTEM（Foundations, Talent, Elite, Mastery）」に沿って説明します。

11:10～12:00　　会場 B

204 2020年以降を見据えたアスリート育成強化のプランニング

及川 晋平、河野 孝典、松井 陽子

アスリートの育成・強化には、次世代を見据えた長期的な視点が必要です。そのためには、根拠に基づいた目標の設定とその実現に向けたプランの策定が鍵になります。実際の競技団体の事例を見ながら、プラン策定のための現状分析・課題抽出方法、各種事業の活用など、作成におけるポイントを解説します。

12:50～13:40　　会場 A

205 ハイパフォーマンススポーツにおける女性の活躍
～女性エリートコーチ育成は「誰」が取り組む？～

浅見 敬子、加藤 敏弘、菅原 智恵子、山下 修平

ビジネスやスポーツに限らず、活躍する女性の周囲には「男女を問わず能力を評価するという考えを持つ存在」がいることが一般的ですが、日本のスポーツ界ではそのような考え方がまだ浸透していません。多くの女性が活躍する海外の事例を紹介し、日本のハイパフォーマンススポーツにおける女性の活躍について、登壇者を交え議論します。

12:50～13:40　　会場 B

206 世界で勝ち続けるには理由（わけ）がある～リーダーに求められる18の特性～

秋草 美奈子、櫻井 誠一、皆川 賢太郎、河合 純一

強豪国では、競技団体の強化全体を統括する「ハイパフォーマンスディレクター（HPD）」が重要な存在となっており、日本でものこの人材育成が急務とされています。HPDに求められる資質・特性とは何か、そして日本における育成システムをどう構築していくか、国内外の調査結果を示しながら考えます。

13:50～15:00　基調講演　　会場 A B

207 ハイパフォーマンスにおけるコーチング手法
～Performance Behaviour～

ポール・ワイルマン

オランダでは心理学者や精神科医等の専門家から成るPerformance Behaviourグループがナショナルチームのメンタルサポートにあたっています。そのグループを統括するポール・ワイルマン博士から、「Performance Bahaviour」の学術的背景やヨーロッパの事例を紹介いただきます。

15:10～16:00 会場 A

208 大会における感染症対策

篠塚 規、蒲原 一之、土肥 美智子

平昌2018大会でノロウイルス感染が問題となったように、国際大会に参加する際には入念な事前準備を含めた感染症対策が不可欠です。平昌帯同医と感染症専門医を交え、東京2020大会に向けて海外から持ち込まれる危険性のある感染症への対策を含め、注意すべき点等について話し合います。

15:10～16:00 会場 B

209 東京2020大会の価値ある成功に向けて～価値を失わせる脅威に対峙する～

和久 貴洋

スポーツの健全性（スポーツ・インテグリティ）に対して社会から大きな期待と関心が集まっています。東京2020大会に向けてオールジャパンで準備が進められている今、東京2020大会の「価値ある成功」とは何か、また、そのためにハイパフォーマンススポーツに携わる者がすべきことは何か、改めて考えましょう。

16:10～17:10 会場 A B

210 東京2020大会を2年後に控えた今、医・科学ができること

飯塚 太郎、禰屋 光男、山田 耕司、窪 康之

東京2020大会までの限られた時間の中で、ハイパフォーマンスセンターは何ができるか。競技現場で活躍する競技団体スタッフと共に、医・科学サポートを効果的に行うための組織間連携のあり方等について議論します。

17:15～18:00 クロージング 会場 A B

211 東京2020大会以降も見据えて、世界が目指すところ、そしてハイパフォーマンスセンターが目指す姿

アン・マークリンガー、ポール・ワイルマン、ルイーズ・バーク、石毛 勇介、久木留 毅

世界は既にパリ2024大会・2026冬季大会を見据えて動き出しています。変わり行く世界の動向も踏まえ、長期的かつ俯瞰的な視野で国際競技力向上を考えていくことが必要です。クロージングセッションとして、2日間で取り上げた様々な話題を振り返りながら、基調講演者と共に東京2020大会とその先を見据えたハイパフォーマンススポーツのビジョンについて議論します。

9:00～17:00 ポスター展示 会場 C

220 国立スポーツ科学センター 研究発表

ポスター配置図 P.11
ポスター抄録 P.11～19

ハイパフォーマンスセンターでは、国立スポーツ科学センター（JISS）を中心に、トップアスリートの支援や国際競技力向上に資する研究を行っています。競技現場における研究成果の活用事例や他団体との連携事業の一部をご紹介します。

11:20～12:00 ポスター発表

9:00～18:00 ブース展示 会場 D

230 女性が伸ばす競技力、女性だから出来ること

スポーツ庁委託事業 女性アスリートの育成・支援プロジェクト「女性アスリートの戦略的支援プログラム」

女性アスリートの国際競技力向上のための支援や、ジュニア期から健全に競技を継続できる環境の整備を目的に、各方面で様々な取り組みが行われています。関係組織における取り組みや女性アスリートに関する調査・研究で得られた知見等をご紹介します。

11:20～12:00 ポスター発表

登壇者略歴

石毛 勇介　ISHIGE Yusuke

101 211

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　副センター長／スポーツ科学部長

国際武道大学体育学部科准教授を経て、2011年よりJISSに勤務し、2016年より現職。専門はスポーツバイオメカニクス。主に雪上系種目の支援を担当。

奥脇 透　OKUWAKI Toru

101

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　副センター長／スポーツメディカルセンター長

整形外科医として、トップアスリートのスポーツ診療のほか、メディカルチェックや臨床研究に従事。トリノ2006大会、バンクーバー2010大会、ソチ2014大会、平昌2018大会に日本選手団本部ドクターとして帯同。

横澤 俊治　YOKOZAWA Toshiharu

101

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　研究員

筑波大学体育科学研究科修了。2006年より現職。専門領域はスポーツバイオメカニクス。体力と技術とパフォーマンスの多角的評価、筋骨格モデルを用いた走動作や跳動作の解析、スピードスケートにおける滑走軌跡と滑走速度の分析などに従事。

アン・マークリンガー　Anne MERKLINGER　基調講演者

102 211

Own The Podium (OTP)　最高経営責任者

オリンピアン（カーリング）。1979年ユニバーシアード大会競泳女子200m平泳ぎ銀メダル取得等、競泳選手として活躍の後、カーリングに転向。カナダ国内の主要大会を4度制覇するなど、トップカーラーとしても結果を残した。引退後はカヌーカヤック協会の事務局長に就任。障がい者スポーツ関係団体等でも要職を歴任し、20年以上に渡りスポーツ関係団体の運営等に従事。Own the Podiumでは夏季競技担当責任者を務めた後、2012年より現職。カナダ女性スポーツ振興協会（CAAWS）やカナダ国内の競技会の運営団体等、スポーツ関連ボランティア経験も豊富。

徳南 堅太　TOKUNAN Keita

103

デロイト トーマツ コンサルティング合同会社

オリンピアン（フェンシング）。高校時代に恩師のすすめでフェンシングを始め、2011年全日本選手権男子サーブル優勝。2014年仁川アジア大会、2015年世界選手権、リオ2016大会に出場。

亀井 明子　KAMEI Akiko

103

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　先任研究員

先任研究員。公認スポーツ栄養士。栄養面から選手のパフォーマンス発揮のための支援・研究を行っている。

白井 克佳　SHIRAI Katsuyoshi

103

日本スポーツ振興センター　ハイパフォーマンス戦略部　開発課　課長／機能強化ユニット　アスリートデータグループ　サブリーダー

国立スポーツ科学センター設置準備室、スポーツ情報研究部等を経て現職。専門はスポーツ情報、エリートスポーツ政策。アスリートデータベース、データ活用チーム担当。

田村 尚之　TAMURA Naoyuki

103

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　主幹

様々なトレーニング指導現場の経験を活かし、競泳・アーティスティックスイミングのトレーニングサポートやトレーニング業務支援システム（SCWAT）の開発を担当。トレーニングサポートに役立つ事例や成果の蓄積を検討している。

ポール・ワイルマン　Paul WYLLEMAN　基調講演者

104 207 211

ブリュッセル自由大学　教授
オランダオリンピック委員会･スポーツ連合(NOC*NSF)　TeamNL Performance Behaviour　Performance Manager

専門はアスリートキャリア、トップアスリートの心理学的能力、ハイパフォーマンススポーツにおける心理サポート。多数の個人・団体競技を対象に、ヨーロッパ選手権やオリンピック等の主要国際大会における選手・指導者への現場サポートに25年以上に渡り従事。2013年よりNOC*NSFにて現職に就任し、心理学者等からなるサポートチームを牽引。東京2020大会に向けてもサポートを行っている。ヨーロッパスポーツ心理学会・元会長。2017年国際応用スポーツ学会（AASP）Distinguished International Scholar受賞。

宇城 元　UJIRO Hajime

104

順天堂大学　スポーツ健康科学部　会計課

パラリンピアン（パワーリフティング）。日本パラ・パワーリフティング連盟正会員。大学在学中にバイク事故で脊髄を損傷。その後、パワーリフティングに出会い、数々の健常者大会で優勝。日本人で初めてランキング入りを果たしてアテネ2004大会、ロンドン2012大会に出場し、入賞。自己ベストの188kgは75kg級日本記録となっている。

永井 崇匡　NAGAI Takamasa

104

学習院大学　理学部数学科　4年生

7歳で柔道を始め、中学3年時に全日本視覚障碍者柔道・学生大会で優勝。その後も高校1・2年生時には全日本視覚障碍者柔道大会で73kg級準優勝、大学1・2年時で同優勝を果たす。2017年IBSA柔道ワールドカップ（ウズベキスタン）出場。東京2020大会でのメダル獲得を目指す。

森田 卓　MORITA Takashi

104

大阪体育大学　スポーツ局　アスレティックディレクター

プロサッカークラブ・サガン鳥栖の運営会社にて、スポンサー営業及び試合運営を担当。2017年12月より母校でもある大阪体育大学の「スポーツ局」創設に参画し、2018年4月より現職。主に学内運動クラブや選手・指導者への支援を担当し、総合的な「人間力」を備えたスポーツ人材の育成を目指す「大体大DASHプロジェクト」にも従事。

山口 美咲　YAMAGUCHI Misaki

104

星野リゾート　星のや東京 サービスチーム

生後10ヶ月で水泳を始め、2009年国民体育大会で100m自由形の日本新記録（当時）を樹立。北京2008大会女子4×200mリレー、リオ2016大会女子4×100mリレーに出場し入賞。引退後、2017年4月に株式会社星野リゾートに入社し、現在は「星のや東京」に勤務。

髙嶌 遥　TAKASHIMA Haruka

104

日本スポーツ振興センター　ハイパフォーマンス戦略部　戦略課

元アイスホッケー女子日本代表。高校1年時の代表選出以降、オリンピック予選、世界選手権等の国内外の大会で活躍。スイス、ドイツのトップリーグでもプレー。現役引退後は、JOCのアスリート就職支援事業や早稲田大学の大学スポーツ振興推進事業に従事。2018年4月より現職。

千田 健太　CHIDA Kenta

104

日本スポーツ振興センター　ハイパフォーマンス戦略部　戦略課

オリンピアン（フェンシング）。2006年ワールドカップ東京大会以降、数々の国際大会で個人・団体のメダルを獲得し、ロンドン2012大会で男子フルーレ団体銀メダル。2016年の現役引退後、筑波大学大学院修士課程修了。2018年6月より現職。

ルイーズ・バーク　Louise BURKE　基調講演者

201　211

オーストラリア国立スポーツ研究所(AIS)　主任栄養士

エリートアスリートの教育・カウンセリングにおいて、スポーツ栄養士として35年以上のキャリアを持つ。オーストラリア国立スポーツ研究所スポーツ栄養部門にて、1990年の設置以来現在までの長き渡りリーダーを務める。1996–2012年夏季オリンピック大会にてオーストラリア代表チームの栄養士として従事。これまでに研究論文や書籍寄稿を含めて300以上出版し、スポーツ栄養学の教本も多数執筆・編集している。2009年にはその功績によりオーストラリア勲章を受章。

相澤 勝治　AIZAWA Katsuji

202

専修大学　専修大学スポーツ研究所　准教授
日本レスリング協会　スポーツ医科学委員会　副委員長

中央大学卒業後、筑波大学大学院にて博士号（体育科学）取得。筑波大学準研究員、日本学術振興会特別研究員PD（東京大学）を経て現在に至る。日本レスリング協会スポーツ医科学委員会では、スポーツ科学担当として減量やコンディショニングに関する調査研究や医科学情報の共有・発信の活動に取り組んでいる。

近藤 衣美　KONDO Emi

202

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　研究員

公認スポーツ栄養士。主にアスリートの適切なウエイトコントロールの研究に従事。体重階級制競技の急速減量が身体に及ぼす影響や減量後の最適なリカバリー方法について研究を行い、研究結果を活かした栄養サポートを行っている。

西牧 未央　NISHIMAKI Mio

202

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　研究員

2008・2009年レスリング世界選手権優勝。2015年から現職。体重階級制競技選手の減量に関する研究に従事。女性アスリートを対象に、急速減量が生体内に及ぼす影響を明らかにし、性差を考慮した減量方法の確立を目指す。

山下 大地　YAMASHITA Daichi

202

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　研究員

2014年よりJISSに参画し、2017年9月より現職。ハイパフォーマンスジム担当。主に球技、格闘技選手を対象とした体力測定および動作分析を行っている。専門はバイオメカニクス、ストレングス＆コンディショニング。

坂爪 亮介　SAKAZUME Ryosuke

203

オリンピアン(スピードスケート･ショートトラック)

ソチ2014大会、平昌2018大会に2大会連続出場。2016年から韓国に拠点を移し、元韓国代表コーチに師事。平昌2018大会で日本勢3大会ぶりとなる個人種目入賞、2018年3月の世界選手権5000mリレーで日本勢9季ぶりの銅メダル獲得。長年ショートトラック男子のエースとして活躍し、2018年5月現役引退を表明。

ジェイソン・ガルビン　Jason GULBIN

203

International Sport Advisory Services (ISAS)　ディレクター

オーストラリア国立スポーツ研究所（AIS）でタレント発掘・育成のナショナルマネジャーとして13年間勤務。現在はJSCハイパフォーマンス戦略部アドバイザーとしてアスリート育成パスウェイ構築の支援提供を行っている。

及川 晋平　OIKAWA Shinpei

204

日本車いすバスケットボール連盟　男子日本代表　ヘッドコーチ

16歳の時に骨肉腫を発症。闘病生活を経て車いすバスケの強豪「千葉ホークス」に加入。22歳からのアメリカ留学で、本格的に競技者としての道を拓く。シドニー2000大会日本代表、ロンドン2012大会日本代表アシスタントコーチ、リオ2016大会ヘッドコーチを務める。漫画「リアル」のモデルの1人で、車いすバスケの普及・発展に大きく貢献している。

河野 孝典　KONO Takanori

204

全日本スキー連盟　ノルディック複合　ヘッドコーチ

アルベールビル1992大会でノルディック複合団体初の金メダルを獲得。続くリレハンメル1994大会で団体は2連覇と日本人初の同種目個人銀メダル獲得を果たす。現役引退後、ドイツに留学しコーチ資格を取得。1999年全日本ジュニアコーチ就任。コーチとしてソチ2014大会で自身以来20年ぶりの個人銀メダル獲得、平昌2018大会での2大会連続銀メダル獲得に貢献。

松井 陽子　MATSUI Yoko

204

日本スポーツ振興センター　ハイパフォーマンス戦略部　戦略課

器械体操からフリースタイルスキーエアリアルに転向し、全日本選手権優勝。引退後、全日本チームのコーチに就任し、トリノ2006大会日本代表コーチも務める。JOCタレント発掘・育成支援アシスタントディレクターを経て、2012年12月にJSCに参画し、2016年6月より現職。

浅見 敬子　ASAMI Keiko

205

日本ラグビーフットボール協会　理事

元ラグビー女子日本代表。女子7人制ラグビーが正式種目として採用されたリオ2016大会では、唯一の女性ヘッドコーチとして出場。2018年5月、ラグビー国際統括団体「ワールドラグビー」で女性初の理事に就任。2018年度から「女性エリートコーチ育成プログラム」のコーディネーターを務める。

加藤 敏弘　KATO Toshihiro

205

日本バスケットボール協会　技術委員会指導者養成部会委員　コーディネーター
茨城大学　人文社会科学部　教授

「女性エリートコーチ育成プログラム」において、2016年度より2ヶ年に渡り日本バスケットボール協会のコーディネーターを務める。同協会をはじめとするバスケットボール関係団体にて、主に指導者の養成を中心とした様々な取り組みに従事。専門はコーチング、スポーツ社会学。

菅原 智恵子　SUGAWARA Chieko

205

日本フェンシング協会

高校教員としてフェンシング部の指導にあたるかたわら、アテネ2004大会より3大会連続でオリンピックに出場。2007年世界選手権銅メダル獲得、北京2006大会個人フルーレ7位入賞。2012年よりナショナルチームで指導し、現在はナショナルチーム女子フルーレコーチを務める。2016年より「女性エリートコーチ育成プログラム」に参加。

山下 修平　YAMASHITA Shuhei

205

日本スポーツ振興センター　ハイパフォーマンス戦略部　開発課　主任専門職

茨城県立医療大学嘱託助手、JOC専任情報科学スタッフを経て、2008年10月よりJISSにて地域タレント発掘事業の全国展開に従事。2013年よりマネージャーとして「女性アスリートの戦略的強化プログラム」を担当。

秋草 美奈子　AKIKUSA Minako

206

コーン・フェリー・ヘイグループ　グローバル・プロダクトグループ　シニア・コンサルタント

ITベンチャー企業のエンジニアを経て、現所属に入社。人材アセスメント診断調査のリーダーを務め、企業向けコンピテンシー調査の設計・導入・運営及び国際展開支援を担当。得意のデータ分析から、個人や組織の現状や強み・弱みを掘り下げて能力・組織開発の提言に繋げるプロジェクトへの従事多数。英国心理学学会の認定資格を持ち、心理統計アセスメントに関する経験も豊富。

櫻井 誠一　SAKURAI Seichi

206

日本身体障がい者水泳連盟　常務理事・技術委員長

神戸市職員として勤務のかたわら、1989年極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会「フェスピック」（神戸市開催）でのボランティアを機にパラ水泳クラブを結成し、選手の育成に取り組む。以降、長年にわたりパラ水泳の指導者及び選手育成の仕組みづくりに従事し、現在に至る。神戸学院大学客員教授、関西学院大学非常勤講師。

皆川 賢太郎　MINAGAWA Kentaro

206

全日本スキー連盟　常務理事・競技本部長

オリンピアン（アルペンスキー）。若くから日本のエースとして活躍し、長野1998大会から4大会連続で出場。トリノ2006大会では日本人50年ぶりの入賞を果たす。2014年に引退後、全日本スキー連盟常務理事に就任し、2017年からは競技本部長も務める。スキー以外にも活躍の場を広げ、ウィンタースポーツ産業全体の発展に尽力している。

河合 純一　KAWAI Junichi

206

日本スポーツ振興センター　ハイパフォーマンス戦略部　開発課　主任専門職
2020東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会　アスリート委員会　副委員長

パラリンピック競泳金メダリスト。日本パラリンピアンズ協会会長。日本身体障がい者水泳連盟会長。生まれつき左眼の視力がなく、15歳で全盲となる。バルセロナ1992大会からロンドン2012大会まで6大会連続出場し、通算21個のメダルを獲得。2016年日本人で初めてパラリンピック殿堂入り。競技普及や環境整備などに尽力している。

篠塚 規　SHINOZUKA Tadashi

208

千駄ヶ谷インターナショナルクリニック　院長

外科医として活躍するかたわら、旅行医学の教育を始め、日本旅行医学会を設立し、専務理事を務める。世界保健機構（WHO）Green Book編集委員。国際旅行医学会Journal of Travel Medicine編集委員。千葉大学客員教授。日本サッカー協会医学委員会予防接種アドバイザー。

蒲原 一之　KAMAHARA Kazuyuki

208

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　副主任研究員

平昌2018大会でJSCが設置したハイパフォーマンスサポート・センターに医務班ドクターとして参加。スタッフの渡航前予防接種および現地での感染症対策を担当。

土肥 美智子　DOHI Michiko

208

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　副主任研究員

平昌2018大会派遣前メディカルチェックを担当。北京2010大会、ロンドン2012大会、リオ2016大会にオリンピック選手団本部ドクターとして帯同。日本オリンピック委員会医学サポート部門員。国際オリンピック委員会Sport and active society委員会委員。国際サッカー連盟および日本サッカー協会医学委員。

和久 貴洋　WAKU Takahiro

209

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　副センター長／スポーツインテグリティ・ユニット　ユニット長

JISS設置準備時よりハイパフォーマンススポーツにおける情報戦略機能の立上げと強化に従事し、各種事業の立ち上げに尽力。ハイパフォーマンススポーツに関する様々な取り組み、資源、システムに関し広い知見を持つ。

飯塚 太郎　IIZUKA Taro

210

日本バドミントン協会　ナショナルチーム　パフォーマンス分析スタッフ

東京大学卒業。同大学院修士課程修了。JISS研究員、チーム「ニッポン」マルチサポート事業科学スタッフ、同パフォーマンス分析スタッフ（バドミントン担当）を経て、2017年より現職。

禰屋 光男　NEYA Mitsuo

210

日本車いすバスケットボール連盟　男子日本代表チーム　フィジカルフィットネス・コンディショニングアドバイザー
びわこ成蹊スポーツ大学　スポーツ学部　准教授

東京大学大学院博士課程（学術）修了。2015年から車いすバスケットボール男子代表チームにスタッフとして参加し、科学的な取り組みの全般の助言を行う。専門は高地・低酸素トレーニング。近年はリカバリーに関する研究も行っている。

山田 耕司　YAMADA Koshi

210

日本卓球協会　スポーツ医・科学委員会　専任コーチングディレクター

静岡大学大学院修了後、小学校4年から続けた卓球の経験をいかしベトナムにてジュニア選手への卓球指導を行う。帰国後の2002年にNPO法人「卓球交流会」を設立、現在も運営に携わっている。2003年頃から映像・情報スタッフと日本卓球協会に参画し、2017年4月より現職。

窪 康之　KUBO Yasuyuki

210

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　副主任研究員

2010年より現職。スポーツ医・科学支援事業とハイパフォーマンスサポート事業を統括しながら、競泳、ウエイトリフティングなどの動作分析に従事。

久木留 毅　KUKIDOME Takeshi

211

日本スポーツ振興センター　国立スポーツ科学センター　センター長／ハイパフォーマンス戦略部　部長
専修大学　文学部　教授

レスリング日本代表コーチ、英国ラフバラ大学客員研究員を経て2016年より現職。専門は高度競技マネジメント（トップスポーツ政策、競技スポーツにおける情報戦略研究）及びコンディショニング（アスリートの減量）研究。